標 題 名

D－2－1　　430

標 題 名

農事試驗成績要報　第三號

著 者 名

発行者名

三重縣立農事試驗場

発 行 年

明治４４年（1911年）

製作年月

令和４年６月

明治四十四年三月

農事試驗成績要報

第三號

三重縣立農事試驗場

緒言

本號は夏作に屬する水稻陸稻及冬作に屬する麥作及油菜に關し多年繼續施行したる諸試驗中成績最も確實にして縣下一般に應用して確に其利益あるを認めたるものを摘錄したるものなり希くは當業者諸子熟讀玩味以て實地の應用に努め苟も遺憾なきを期せられむ事を

明治四十四年三月

三重縣立農事試驗場

農事試驗成績要報　第三號

目次

夏作

水稻の部

一、移植株數粗密の得失　一丁
二、綠肥の施用上燐酸加用の効果　三丁
三、鯡〆粕及大豆粕の窒素と綠肥の窒素との効顯比較　六丁
四、窒素質肥料經濟的價値比較　八丁

陸稻の部

一、播種の適期　九丁
二、適當なる播種量　十丁

三、條播と點播との得失　十一丁

麥作の部

一、裸麥の良種　十二丁
二、大粒種子と小粒種子との得失（大麥小麥裸麥）　十四丁
三、條播と點播との得失（裸麥）　十五丁
四、大麥播種の適期　十六丁
五、裸麥に對する燐酸質肥料効顯比較　十七丁
六、麥作に對する肥料分施の得失　十八丁

油菜の部

一、大粒種子と小粒種子との得失　十九丁
二、大苗と小苗との優劣　二十丁
三、適當なる株間　廿一丁

水稲の部

一　移植株數粗密の得失

本田移植株數の粗密は其收量に關係すること少からず而して本縣に於て從來一般に粗植の習慣あり即ち其利害を確めん爲め數年施行したる株數試驗の成績を掲くれば左の如し

種別	一歩株數	三ケ年平均收量
早稲（石白）	三十六株	二石〇八升二合
	四十二株	二石〇〇七合
	四十八株	一石九斗七升九合
	五十四株	二石
	六十株	二石一斗六升二合
	三十六株	二石一斗四升五合
	四十二株	二石二斗一升五合

中稲（關取）	四十八株	二石〇九升九合
	五十四株	二石二斗四升六合
	六十株	二石一斗九升一合
晩稲（神力）	三十六株	二石〇三升六合
	四十二株	二石一斗九升四合
	四十八株	二石〇八升四合
	五十四株	二石一斗四升三合
	六十株	二石一斗三升四合

前表によれば早稲にありては六十株以上中稲にありては五十四株以上晩稲の如き株張旺盛なるものにありても尚四十二株以上を植付けたるもの最も収量多きを示せり即ち從來一般に行はるゝ尺角植（一歩三十六株）に比し何れも一斗内外の増收あるを知るべく且つ此の成績は獨り本縣に止まらず各府縣の試驗成績も亦殆んど一致し尚當場に於ける苗數對株數試驗の成績を見るときは苗數の如何に係らず密植に利あるを示せしこと左表の如し

併も密植は粗植に比し米質常に良好なり當業者諸子遲疑するなく速に舊慣を改め適宜植付株數を增加し收量の增加と米質の昂上とに努めむ事を望む

苗數と株數試驗（關取種）

苗數	一步株數	四ヶ年平均收量
三本植	三十株區	二石〇九升八合
	四十二株區	二石一斗〇七合
	五十四株區	二石一斗七升四合
四本植	三十株區	二石〇六升四合
	四十二株區	二石一斗五升一合
	五十四株區	二石二斗九升八合
五本植	三十株區	一石九斗九升九合
	四十二株區	二石一斗八升
	五十四株區	二石二斗三升九合

二　綠肥の施用上燐酸加用の效果

稻作の肥料として種々の綠肥を施用するに當り從來一般にこれを單用するの習慣あり然るに是れに適量の燐酸肥料を加用するは養分配合上至當の事にして確かに有利なるべきものを認め其得失を確めんが爲め四種の綠肥に對し過燐酸石灰を加へたるものと然らざるものとを比較試驗したるに次の如き成績を示せり

綠肥の種類	試驗區別	三ヶ年平均收量
青刈大豆（乾）	一、反當四十貫單用	二石〇二升一合
	二、前者に過燐酸石灰五貫加用	二石〇七升二合
	三、反當七十貫單用	二石一斗七升六合
	四、前者に過燐酸石灰五貫加用	二石二斗三升一合
	五、反當百貫單用	二石一斗六升五合
	六、前者に過燐酸石灰五貫加用	二石二斗五升六合
野草（乾）	一、反當四十貫單用	一石九斗〇七合
	二、前者に過燐酸石灰五貫加用	一石九斗四升五合
	三、反當七十貫單用	一石九斗二升九合
	四、前者に過燐酸石灰五貫加用	一石九斗九升一合

五、	反當百貫單用	
六、	前者に過燐酸石灰五貫加用	二石〇一升八合
苜蓿（乾）		
一、	反當四十貫單用	
二、	前者に過燐酸石灰五貫加用	二石〇五升二合
三、	反當七十貫單用	
四、	前者に過燐酸石灰五貫加用	二石一斗三升七合
五、	反當百貫單用	
六、	前者に過燐酸石灰五貫加用	二石二斗〇五合
紫雲英（乾）		
一、	反當四十貫單用	
二、	前者に過燐酸石灰五貫加用	二石一斗八升五合
三、	反當七十貫單用	
四、	前者に過燐酸石灰五貫加用	二石一斗六升二合
五、	反當百貫單用	
六、	前者に過燐酸石灰五貫加用	二石二斗八升五合
		二石一斗七升六合
		二石二斗〇三合
		二石二斗〇九合
		二石二斗八升二合
		二石二斗〇四合
		二石三斗三升二合

前表によれば野草の如き質粗硬にして分解遲緩なるものにありては之を單用し

たるものも是れに過燐酸石灰を加用せるものも殆ど差異なきが如しこ雖も青刈大豆苜蓿紫雲英等の如き比較的分解可良なる綠肥にありては單用せるものに比し過燐酸石灰を加用せるものは何れも著しき增收あるを示し綠肥施用量の多少に不拘適量の燐酸肥料を加用するの有利なるを知るべし

三　鯡〆粕及び大豆粕の窒素と綠肥の窒素との効驗比較

稻作肥料こして鯡〆粕大豆粕等の如き金肥を主肥こするこきは多額の肥料代を要し收支差引の結果收益比較的少なき憾あり故に是等金肥に代ふるに綠肥を以てせば其收益に如何なる得失あるやを確むるの必要を認め鯡〆粕及大豆粕に對し各種の綠肥を施用せしものこ比較試驗せしに其成績左表の如き決果を呈せり

試驗區別	三ヶ年平均收量	仝上價額	肥料代	收穫物價額より肥料代差引殘高
一　鯡〆粕	二、三一九石	三一、三〇七円	八、九七四円	二二、三三三

二	大豆粕	二、二五九	三〇、四九七	六、八三二	二三、六六五
三	青刈大豆(乾)	二、一六六	二九、二四一	四、九三五	二四、三〇六
四	野草(乾)	一、八六一	二五、一二四	四、三八一	二〇、七四三
五	紫雲英(乾)	二、二九六	三〇、九九六	五、二三七	二五、七五九
六	苜蓿(乾)	二、三〇一	三一、〇六四	四、八三五	二六、二二九
七	白ツメ草(乾)	二、三三八	三一、五六三	五、三六二	二六、二〇一

備考 一、各區共窒素一貫五百匁燐酸及び加里は各二貫づゝの割合に施用せり而して窒素の全量は之を供試肥料に仰ぎ燐酸及加里は其定量に達する迄過燐酸石灰及藁灰を以て補給せり

二、左表の玄米價額は一石拾參圓五拾錢と見積りたり

三、肥料價額は既往七ヶ年の平均市價により補給せし過燐酸石灰及藁灰の價額をも含む

本試驗の成績に據れば野草は綠肥中最も粗硬分解遲緩にして從つて其効果不充分なれども紫雲英苜蓿白ツメ草青刈大豆等の栽培綠肥にありては何れも金肥を施用せるものに比し一反歩壹圓乃至參圓九拾錢內外の利得あるを知るべく肥料經濟上之れが利用に努むるの急なるを認む

四　窒素質肥料經濟的價値比較

稻作の肥料として施すべき窒素質肥料は種々あり從つて其適當なる肥料を撰ぶと否とは米作の收量と肥料の經濟上至大の關係あるものなれば農家は注意して安價に且つ効果多き肥料を撰ばざるべからず即ち當場に於ては縣下に普通使用せらるゝ所の窒素質肥料に就き數年間比較試驗したるに左の如き成績を示せり

試驗區別	肥料代價	六ケ年平均收量	仝上價格	收穫物價額より肥料代差引殘高
一　鯑〆粕	六、〇〇〇圓	二、一八八石	二九、五三八圓	二三、五三八圓
二　鯑〆粕 藁灰	五、五〇〇 五、〇〇〇	二、一三三	二八、七九六	二二、七九六
三　大豆粕	六、〇〇〇	二、二二八	三〇、〇八〇	二四、〇八〇
四　大豆粕 過燐酸石灰	五、〇〇〇 一、〇〇〇	二、二三一	三〇、一一九	二四、一一九
五　菜種油粕	六、〇〇〇	二、一〇〇	二八、三五〇	二二、三五〇
六　菜種油粕 過燐酸石灰	五、五〇〇 五〇〇	二、一二六	二八、七〇一	二二、七〇一

前表に據れば大豆粕を使用せしものは玄米の收量に於ても亦收量價額より肥料

代を差引したる收益高に於ても共に最上位にありて金肥中最も安價にして效果多きを示し且つ之れを單用するよりも適量の過燐酸石灰を配用するときは一層其效果多く之れに反し鰊〆粕及菜種油粕等の極めて不經濟なるを知るに足らん

陸稻の部

一　播種の適期

播種の期節は其地方の風土により一概に定むべき事にあらざるも其適期を得ると否とは收量及品質に著しき關係を及ぼすものなるを以て能く地方の風土に鑑み其適期を過らざる樣注意せざるべからず今當場に於て數年間施行したる試驗の成績を示せば左の如し

試驗別	四ケ年平均收量
五月十一日播	一石四斗七升九合
五月十八日播	一石七斗一升二合

五月二十五日播　一石七斗二升二合
六月一日播　一石五斗七升八合
六月八日播　一石五斗三升六合

即ち當場の如き風土にありては五月二十日前後を以て播種の適期たるを確めたり

二　適當なる播種量

播種の適量は地方の風土により或は播種期の早晩に依り素より一樣ならざれども其多きに失するも少きに過るも共に收量に影響するものなれば當業者は氣候其他の狀況を考へ厚薄其度を過らざる樣注意せざるべからず今當場に於て數年間施行したる播種量試驗の成績を示せば左の如し

試驗別	四ヶ年平均收量
二升播	一石二斗九升八合
三升播	一石六斗七升八合

四升播　一石六斗一合
五升播　一石五斗九升四合
六升播　一石四斗九升一合

右試驗の成績に依れば陸稻の播種量は三升乃至四升を以て適量と認む而して之れより厚播とするも薄播とするも共に收量を減ずるものと知るべし

三　條播と点播との得失

播方の方式も亦收量に差異を來すものなり今左に當場の試驗成績を示せば

試驗別	四ケ年平均收量
條播	一石八斗八升五合
五寸点播	一石七斗九升
一尺点播	一石六斗六升七合

右試驗の成績に據れば條播を可とし点播を不利とす而して点播の株間遠かるに從ひ益々收量を減ずるものと知るべし

麥作の部

一　裸麥及小麥の良種

何種の作物を問はず品種に依りて收量品質等に差異あるものにして之れが適良種を撰擇するは農藝上最大要務にして如何に肥培其他に周到なるも其根本たる品種不良なる時は到底滿足なる結果を望み難し故に農家は左記試驗の成績に鑑み品質優良にして併も收量多き良品種の撰擇に努めざるべからず

裸麥

品種名	七ヶ年平均收量	品質
白胴	二石二斗四升六合	上
佐賀	二石一斗一升二合	下
膝八	二石二斗三升九合	中
米麥	二石〇二升四合	中
鎌折	二石二斗〇五合	下

高知	二石一斗七升一合	下
在來	二石三斗一升一合	中
福岡	二石三斗四升三合	中
屋根裸	二石一斗〇五合	上
白珍子	二石〇四升七合	上
鳴海裸	二石二斗七升六合	中
ユビンカタギ	二石三斗七升	中

小麥

品種の名	五ヶ年平均收量	品質
フルツ	一石八斗三升五合	上
カリホルニヤ	一石八斗六升九合	上
モルト赤	一石八斗三升四合	上
相州	一石八斗	下
オレゴン	一石九斗三升三合	上
早生小麥	一石七斗九升七合	下

和歌山	二石一斗	中	
内山	一石九斗一升五合	中	
寶満	二石二斗六升二合	上	
砂川達磨	二石〇六合	中	
富澤	一石七斗三升七合	中	
三尺小麥窪	一石七斗六升一合	下	
柳窪	一石九斗一升三合	中	
江鳥	二石二斗三升五合	中	

以上の成績に據れば裸麥にありては白胴、鳴海裸、福岡、コビンカタギ、在來種膝八屋根裸等優位を占め小麥にありては寶滿、江嶋、和歌山、砂川達磨、内山、柳窪、等優良にして外國種は何れも品質可なるを認む

二　大粒種子と小粒種子との得失

撰種の精粗は其收量の多少に少からざる影響を及ぼすものなり今當場試驗の成

績を示せば左の如し

試驗區別		四ヶ年平均收量
大麥	大粒種子	三石一斗二升一合
	小粒種子	三石〇三升一合
裸麥	大粒種子	一石九斗八升七合
	小粒種子	一石四斗一升六合
小麥	大粒種子	二石二斗七升二合
	小粒種子	二石一斗一升九合

右成績によれば大粒種子は何れも一反歩に對し小粒種子より一斗以上の增收あるを知るべし故に農家は宜しく鹽水撰を行ひ更らに篩を以て大粒のものを撰び目方重くして粒の大なる種子を播く事に注意せざるべからず

三　條播と点播との得失（裸麥）

播き方の如何も亦收量に著しく差異を來すものなり今當塲試驗の成績を示せば

左の如し

試驗區別	六ヶ年平均收量
條播	二石〇九升八合
四寸点播	一石九斗〇三合
六寸点播	一石九斗七升四合
八寸点播	一石八斗一升五合

右成績によれば條播最も可にして点播は不利なり而して点播は株間遠かるに從ひ收量を減ずるものと知るべし

四　大麥播種の適期

播種の適期は地方の氣候に依つて素より一樣ならざるも其早晩何れに失するも不可なれば農家は注意して適期に播種すること肝要なり今當場試驗の成績を示せば左の如し

試驗區別	五ヶ年平均收量

十月一日播	一石九斗三升四合
十月十日播	二石〇一升五合
十月二十日播	二石三斗〇五合
十月三十日播	二石四斗六升九合
十一月十日播	二石六斗四升三合
十一月二十日播	二石二斗六升二合
十一月三十日播	二石〇七升三合
十二月十日播	一石八斗三升三合
十二月二十日播	一石八斗九升八合

本試驗の成績に依れば當地方により大麥播種の適期は十一月上旬頃にして之れより早きも遲るゝも共に收量を減ずるものと知るべし

五　裸麥に對する燐酸質肥料の効顯比較

同じ燐酸質肥料にても其肥料の性質異るを以て其地方の氣候土質により自ら効果に差異を來すものなり今當場試驗の成績を示せば左の如し

試驗區別	五ヶ年平均收量
過燐酸石灰	二石二斗四升一合
骨粉	二石三斗
トーマス燐肥	二石一斗五升
重過燐酸石灰	二石〇三升五合

備考　各種燐酸質肥料につき含有燐酸は反當一貫づゝとす

右試驗の成績に依れば骨粉を使用したるもの收量最も多し是れ蓋し當場土壤の如き砂勝ちの所にありては比較的分解遲緩なるもの反りて利あるを知るべし故に農家は宜しく其地方の風土を顧み撰擇を誤らざる樣注意せざるべからず

六　裸麥に對する肥料分施の得失

同一肥料を全量に施す場合にありても之を全部一回に施すと數回に分施するとは收量に著しき相違を來すものなり今當場に於て裸麥に就き鰊粕を施し行ひたる試驗の成績を示せば次の如し

試験区別	元肥	追肥	合計	三ヶ年平均収量
鰊〆粕九貫を一回に施す	九貫	一回	九貫	二、一三二
鰊〆粕九貫を二回に分施す	四貫五百匁	四貫五百匁	九貫	二、〇八五
鰊〆粕九貫を三回に分施す	三貫	三貫 三貫 九貫	九貫	一、九七三
無肥料	—	— — —	—	一、四三八

前表の成績によれば元肥一回に施したるもの收量最も多く回數を多くし施肥遲るゝに從ひ收量の減ずるを知るべし然るに從來本縣に於ては一般に施肥遲るゝの傾あり斯くの如きは徒らに麥の成熟を遲れしめ却つて其收量を減じ品質を劣惡ならしむるものなれば農家は宜しく本試驗の成績に鑑み肥料の性質を考へ遲肥の弊を改めざるべからず

油菜の部

一　大粒種子と小粒種子との得失

油菜の種子も亦他の作物と同しく撰種の精粗は其收量に至大の關係を及ぼすものなり今當場試驗の成績を擧ぐれば左の如し

試驗區別	三ヶ年平均收量
大粒種子	九斗五升八合
小粒種子	八斗三升一合

右成績によれば大粒種子は小粒種子に比し一反歩に對し一斗以上の增收あるを知るべし

二　大苗と小苗との優劣

油菜は苗の大小により其收穫に著しく關係するものなり今當場試驗の成績を擧ぐれば左の如し

試驗區別	五ヶ年平均收量
太苗一本植	八斗八升六合
小苗一本植	六斗四升三合

小苗　二本植　　七斗四升二合

右成績によれば太苗最も收量多く小苗に比すれば一反歩二斗以上の增收あるを見るべし故に農家は宜しく苗床の厚蒔を避け短大なる苗を養成するに努むべく若し已を得ず小苗を植うる場合には一株二本植こなすを有利なりとす

三　適當なる株間

株間の適否も亦收量に差異を生ずるものなり今當場試驗の成績を示せば左の如し

試驗區別	三ケ年平均收量
株間五寸	七斗五升九合
株間八寸	七斗八升三合
株間一尺	七斗三升一合
株間一尺五寸	六斗一升七合

右試驗の成績に依れば株間は五寸乃至八寸を以て適當こし遠かるに從ひ收量を減ずるものたるを知るべし

明治四十四年四月一日印刷
明治四十四年四月三日發行

（非賣品）

著作兼
發行者　三重縣立農事試驗場

三重縣津市丸之內貳番屋敷

印刷者　加藤三四郎

三重縣津市丸之內四番屋敷

印刷所　伊勢新聞社活版部

植物防疫資料館
C－524－020
農技研
寄贈
D
2-1
430